

special
1

「病気を治す」以外に病院ができること

社会医療法人ペガサスの広報活動は 「伝える」から「参加していただく」へ

special
2

医療から、そして看護、介護から。
地域社会を支える人々。



Tsubasa

special
1



Pegasus

「病気を治す」以外に病院ができること

社会医療法人。ペガサスの広報活動は「伝える」から「参加していただく」へ

一般企業に比べ、病院をはじめとする医療機関の広報活動はかなり遅れを取っています。

もともと医療に関する広告には法的に厳しい規制があり、積極的に情報を発信しにくい環境にありました。しかし近年は患者さまに必要な情報を提供するために、広告規制が緩和される方向にあります。

こうしたなかで、社会医療法人ペガサスは他の医療機関に先駆けて、広報活動に力を注いできました。その目的は法人の内と外の情報格差をなくすこと。

すなわち、患者さまに病院や医療のことをもっとよく知っていただき、医療界の抱える数々の問題を、患者さま自身の問題として、考えていただけるよう取り組んできました。

また同時に、私たちが自分自身を広報する活動を通して、自らの姿を見直し、医療サービスのレベルアップを図ることも狙いとしてきました。

さらに昨今は、ただ単に「伝える」だけでなく、

地域の方々に「参加していただく」広報活動へと大きくステージアップしています。

そこには、患者さま、地域の皆さまと一緒に、健康的な生活や地域医療を考えていきたい、というペガサスの熱い思いが込められています。

『つばさ』30号の発刊を迎える今回、これまでのペガサスの広報活動について振り返り、今後私たちが何をめざしているのかをレポートします。

「進化する広報活動」

患者さま、地域の皆さまに 参加していただくこと。

社会医療法人ペガサスの広報活動が本格的にスタートして、十数年になる。

「自分たちのことをもつとよく知ってほしい」「医療や看護・介護について理解を深めてほしい」

そんな強い思いでひた走ってきた広報活動だが、ここに来て、ひとつの転換期を迎えている。

それは、「伝える」だけでなく、地域の方々に「参加していただく」ステージへ広報活動を広げていくことである。

民間病院が企画した 市民公開講座。

コンサートをはじめ文化学習の場として、市民の人々に親しまれている堺市立西文化会館（ウエステイ）。平成20年10月25日（土）、そのホールに続く正面入口に朝早くから多くの市民が集まっていた。HIS

フォーラム2008 in堺・市民公開講座「脳卒中を語る」の開場を今や遅しと待つ人々である。

9時30分。開演のベルが鳴る頃、客席の多くが市民で埋まった。ステージの幕が上がり、ホール内は大きな拍手の渦に包まれた。司会進行役として壇上に立った社会医療法人ペガサス理事長・馬場記念病院院長の馬場武彦は、大入りの客席を見渡し、大きな手応えと静かな感動を覚えていた。

この日行われたのは、4人の専門家による講演とパネルディスカッションである。予防医学の見地から順天堂大学大学院加齢制御医学講座准教授・青木晃氏、急性期治療の現場から馬場記念病院副院長・脳

神経外科部長・魏秀復、身体機能の回復については和歌山県立医科大学リハビリテーション医学教授・田島文博氏、そして最後に患者としての実体験をもつ社会医療研究所所長・岡田玲一郎氏が講演した。

各人はそれぞれの専門の立場から、文字通り「脳卒中を語っていた」。「予防→急性期治療→機能回復→患者さまの体験」という流れは、まさに脳卒中という病気を時間軸で理解する上で理想的なシナリオといえるだろう。

たとえば、青木晃先生が「冒険家の三浦雄一郎さんが70代でエベレストに登れたのは、どうしてだと思いますか」といった興味をそそる話題から予防医学を語る。リハビ



『つばさ』がNPO法人日本HIS
話の発端は、平成19年度、本誌

「ペガサスさんで
何かイベントを
企画してください」。

リテーション医学の田島文博先生は、「皆さん、脳卒中になったら、24時間以内に患者さまをベッドから起こさないでダメなんです」と、一般人が驚くような最前線の医学の知識を伝える。講師陣の絶妙な語り口により次々と話が展開され、深刻なテーマにもかかわらず、時には会場が笑いに包まれる場面もあった。

講演の後、会場の質問に答えるパネルディスカッションにより一段と会場は盛り上がり、午後1時過ぎ、予定通りプログラムが終了した。

「わざわざ足を運んだかいがあった」——目には見えないが、そんな充実感と満足感が客席いっぱいに広がっていた。ホールの外ではお客さまを見送り、車いすの方の介助などをするペガサスの職員たちの姿があった。その職員の一人に市民が駆け寄り、声をかけた。「ためになったわ。今度、いつやるの?」。お客さまに喜んでいただけたことを肌で実感し、職員たちも大きな達成感に包まれていた。

HIS フォーラム 2008 in 堺 市民公開講座「脳卒中を語る」

<主な講演内容 ポスターより再掲>

講演内容 (1)

予防：アンチエイジングで脳卒中を撲滅しよう！

講師：順天堂大学大学院加齢制御医学講座

准教授 青木晃氏

加齢や老化をコントロールし、血管年齢をいつまでも若いまま保とうとすることが狙いのアンチエイジング医療。実は三浦雄一郎さんが70代にして2度もエベレスト登頂を果たしたのはアンチエイジング医学のサポートがあったからなのです。アンチエイジングを知って、脳卒中知らずの健康長寿への道を歩みませんか!



講演内容 (2)

急性期治療：信じられない！

ここまで進んだ画像診断・最新治療機器

講師：馬場記念病院副院長／脳神経外科部長

魏秀復氏

脳神経外科は、医学の中では最も早くデジタル化が進んだ分野です。顕微鏡手術、CT・MRIばかりではなく、この領域の画像診断・治療機器の目覚ましい進歩は、日進月歩で脳神経外科医でさえ驚きを隠せません。当日は、日々使っている診断機器や最新治療の一端を供覧いたします。



講演内容 (3)

機能回復：これが本当の脳卒中リハビリテーションだ!!

講師：和歌山県立医科大学リハビリテーション医学

教授 田島文博氏

全身の診察をし、検査結果を検討し、ご家族のことも考えた上で、患者さま中心に取り組むことが脳卒中リハの基本です。発症24時間以内に座位立位を、歩行障害に対しては装具療法を開始します。もちろん日常生活のためのリハも必要です。全身の観点で徹底的に負荷をかけることが機能回復の近道であり王道です。



講演内容 (4)

患者代表：脳卒中にはなりたくない!!

講師：社会医療研究所

所長 岡田玲一郎氏

病気にかかって死ぬまでをどう生きるかは大事なことです。だからこそ、病気によりコミュニケーションがとれなくなったときの治療法や栄養補給、さらには心停止したときの蘇生方法をあらかじめ決めておく「事前指定」の普及活動を永年にわたり実施してきました。そうしたことをお話しするのは意義のあることと思っています。



研究センター（ヘルスケア施設における適切な広報活動などを支援する団体）が主催するヘルスケア情報誌コンクールで、全国から寄せられた病院広報誌（応募数146点）のなかから、「グランプリ」を受賞したことがある。この受賞がきっかけとなり、馬場記念病院が平成20年度のHISフォーラムの主幹病院となり、イベントを遂行することになったのである。

打ち合わせが始まったのは昨年1月。日本HIS研究センターのスタッフが来院し、イベントの概略を説明した。フォーラムは2日間にわたるイベントだ。1日目は、病院広報事例発表会、BHI賞各部門の授賞式などが行われる。これは主に医療関係者を対象にした内容である。続く2日目は、「主幹病院の馬場記念病院さんで自由に企画を考えて



ください」という趣旨だった。

市民公開講座の企画・運営を担当した、ペガサス広報委員会の柳野和彦（社会医療法人ペガサス・法人本部経理部課長代理）は振り返る。

「ペガサスらしさを出すにはどんなイベントをすればいいか、広報委員会で議論しました。そこで、やはり当院の得意分野である脳疾患に係る話をするのが良いのではないかとということになりました。特にこだわったのは一般市民の方々の役に立つ内容にすることです」。

HISフォーラムは、医療関係者がメインの対象者となる。そのため、ともすれば関係者の視線も医療界のみに向けられがちだ。また、病院が発信するイベントとなると、どうしても自院のアピールが出てしまうものである。そうした枠組みや慣例を超えて、「一般市民の方々が気軽に参加できるオープンなイベントにしたい」というのが広報委員会の思っていたのである。

社会医療法人ペガサス・法人本部企画運営局長の田中恭子（馬場記念病院事務部長）は言う。「当法人では、この地域にトータル・ヘルスケアシステムを構築することを、事業目標の一つに掲げています。今回の市民公開講座はその事業目標に通じるものですし、地域の皆さまの

『つばさ』がヘルスケア情報誌コンクールでグランプリを受賞

平成19年度、本誌『つばさ』は、NPO法人日本HIS研究センターが主催するヘルスケア情報誌コンクール（第7回BHI賞）で「グランプリ」に選ばれた。この賞はさまざまな病院広報誌の中から、優秀な作品が受賞するもの。『つばさ』はコンスタントなデザインレベルと豊富な情報量を維持している点、患者さまや地域の方への情報を伝えようとする熱意がある点などが高い評価を得ての受賞となった。





お役に立てる絶好の機会だと思いましたがね」。ベガサスではかねてより保健・医療・福祉・介護の広い分野で総合的な連携体制（トータル・ヘルスケアシステム）を築き、地域医療への貢献をめざしてきた。その方向性に、今回の講演会の趣旨はまさに合致するものだったのである。

「脳卒中を語る」。テーマが決まると、講演をお願いしたい先生も決まり、先生方からも快諾を得ることができた。しかし、この先に広報委員会メンバーの本当の苦労が待ち受けていた。それは、いかにして市民公開講座の開催を広く告知するか、という集客活動である。

案内に奔走したスタッフ。呼びかけに応じてくれた多くの市民の方々。

イベントを1カ月後に控えたある日、広報委員会のイベント担当グループ・ミーティングの席で、田中がきびきびした口調で語っていた。「脳卒中の怖いこと、大変なこと。そして、予防や適切な治療の正しい知識など、一人でも多くの市民に知ってもらいたい脳卒中の真実が、たくさん含まれた講演内容です。私自身もぜひ聴きたいと思っています。だからこそ、地域にいらつやる一人でも



多くの方に、〃脳卒中を語る〃の開催を伝えてほしい。それがまず皆さんにとって重要なお仕事です」。

柳野は田中の言葉を熱心に聞きながら、胸中にはじわじわと大きな不安が募っていった。「ポスターやチラシ類を作り、掲示や配布を行う。それだけで、聴いてみるだけの価値のあることが、どこまで伝わるのだろうか」と、いろいろ考えました。広報委員会に加わって間もない柳野にとって、今回のイベント担当は大役である。責任感の重圧をひしひしと感じていた。柳野たちは考えつく限りの場所にチラシを配布した。ポスターの掲示範囲も広い。「法人の各事業所はもちろん、近隣の診療所、区役所、会場となるウエスティの最寄り駅構内などにも掲出してもらいました。職員の方々にもずいぶん無

理を言って協力してもらいましたね」（柳野）。

広報委員会の責任者である広報委員長・魚野弘子（馬場記念病院検査部次長）は言う。「これまで、さまざまなテーマでのセミナーなどは何度も行ってきました。でも、広報委員会が中心となって開催する市民公開講座は初めての試みです。それだけに集客は一つの課題でした」。

ふたを開けてみれば、講演の1時間も前から参加者が集まるほどの盛況ぶり。ベガサス初の市民公開講座は、大成功を収めたのである。柳野は振り返る。

「こんなに〃一般市民の方々〃をたくさん集めたイベントは、HISフォーラムとしても、大成功だったと思います。ただ、〃会場に入れないうお客さまが出たらどうしようか〃という、理事長の心配を実現できなかったのが少々心残りですけれども（笑）」。

その馬場もまた、今回のイベントにはひとかたならぬ感慨を抱いていた。

「当法人は平成21年1月から、より公益性の高い団体である〃社会医療法人〃としてスタートしました（詳細は最後のページ参照）。その観点からも、この市民公開講座は、今後の社会医療法人ベガサスを象徴

するような出来事でした。一つの民間病院でありながら、公的な役割を果たすことができて、たくさんの人に喜んでいただけた。すごく大事な情報を無償でお届けできましたし、自分たちの活性化にもつなげることができました。得たものは非常に大きいんです。これで自信も深めたいし、もっともっと私たちが堺市や大阪府において、そういう公的役割を担っていききたいと考えています」。

理事長の発案で始まった「毎日が医療体験デイ」。

「伝える広報」から「参加していただく広報」へ発展させたい。それは、理事長の馬場がかねてより抱いていたテーマだった。「地域医療を良くしていくには、患者さまと私たちが一緒に考えていかなければなりません。そのためには、一方通行の「伝える」活動だけでは足りない、とずっと思っていました」。

そこで、馬場は職員にある提案を投げかける。平成19年4月、一年に一度委員会の活動を振り返る「広報委員集会」の席で、馬場は目の前の委員たちにこんな話を切り出したのである。「昨年度も本当にお疲れさまでした。皆さんの頑張りを

評価しています。ただ、一つだけ考えてほしいことがあります。それは、ペガサス医療体験デイです。皆さんも承知しているように、医療体験デイは、地域の皆さまに医療や病院について、理解を深めていただくためのイベントです。それが、どうも最近レクリエーションの要素ばかりが目立ってきた。本来の「医療体験」という目的から離れ、ただの「お祭り」になってきているように感じています」。

厳しい指摘に、委員たちは表情を引き締めた。確かに楽しい催しが増えてきたのは事実。みんなの脳裏に、数カ月前の医療体験デイの模様が蘇っていた。さらに、馬場はアメリカのとある病院を視察した際の体験談を話し始めた。「その病院では、テーマをいろいろ設定して「病院見学ツアー」を行っていました。それを見て、素晴らしいなあ、と思ったものです。ペガサスでも、もっと日常的に医療を体験できる仕組みを作れないでしょうか。地域の方々がいつでも病院を訪れ、医療をもっと身近に感じて学んでいただけるような形。そう、言わば「毎日が医療体験デイ」といった取り組みです」。

この提案に、みんなは度肝を抜かれた。前出の魚野は言う。「最初に話を聞いたときは、正直驚きまし



馬場記念病院

HISフォーラム2008in堺

市民公開講座

脳卒中を語る

開催

講演 + パネルディスカッション

●開催日時：10月25日(土) 9:30~13:00

●会場：ウェスティ(大阪府堺市)

※参加者は公共交通機関をご利用のうえ、お集まりいただきますようお願いいたします。

所在地／堺市西区鳳東町6-600 最寄駅／JR阪和線「鳳駅」、南海バス「西区役所前」

●参加費：無料(当日先着200名)

講師

講演1 予防

アンチエイジングで脳卒中を撲滅しよう!

加齢や老化をコントロールし、血管年齢をいつまでも若いまま保つとすることが狙いのアンチエイジング医学。実は三浦雄一郎さんが70代にして二度もエベレスト登頂を果たしたのはアンチエイジング医学のサバイバーがあったからなのです。アンチエイジングを知って、脳卒中知らずの健康長寿への道を歩みませんか!

青木 晃氏
順天堂大学大学院
加齢病医学講座
准教授
加齢病医学講座
准教授

講演2 急性期治療

信じられない!! ここまで進んだ画像診断・最新治療機器

脳神経外科は、医学の中では最も早くデジタル化が進んだ分野です。脳神経手術、CT・MRIばかりではなく、この領域の画像診断・治療機器の目覚ましい進歩は、日進月歩で脳神経外科医でも知識を磨かなくてはなりません。当日は、日々使っている診断機器や最新治療の一端を御覧いただきます。

魏 秀復氏
馬場記念病院副院長・
脳神経科部長
脳神経科部長
脳神経科部長
脳神経科部長
脳神経科部長

講演3 機能回復

これが本当の脳卒中リハビリテーションだ!!

全身の診察をし、検査結果を検討し、ご家族のことも考えた上で、患者さん中心に取り組む事が脳卒中リハの基本です。発症24時間以内に座位立位、歩行練習に対しては訓練療法を開始します。もちろん日常生活のためのリハも必要です。全身の観点で徹底的に負担をかけることが機能回復の近道であり王道です。

田島 文博氏
和歌山県立医科大学
リハビリテーション学
教授
リハビリテーション学
教授

講演4 患者代表

脳卒中にはなりたくない!!

病気にかかって死ぬまでどう生きるかは大きなことです。だからこそ、病気にによりコミュニケーションがとれなくなったときの治療法や実情を、さらには心停止したときの緊急対応方針が決められて「事前指定」の普及活動を永年にわたり実施してきました。そうしたことをお話しするのは意義のあることと思っています。

岡田 玲一郎氏
社会医療研究所
院長
社会医療研究所
院長

●主催／NPO法人 日本HIS研究センター ●後援団体／大阪府・大阪府私立病院協会・堺市・堺市医師会

●お問い合わせ先／馬場記念病院 地域医療支援室 TEL：072-265-9083 FAX：072-265-9134

組織を横断して活動している 「広報委員会」

社会医療法人ペガサスの広報委員会は患者さまや地域住民、地域医療機関の方々に、さまざまな広報ツールを用いて、ペガサスや医療に対する理解を深めるために活動している。委員会のメンバーは法人各施設・病院各部署から選出。「編集（つばさ・ペガサスニュース）」「イベント」「ホームページ」「広報ツール（ポスターなどの掲示物）」の各グループに分かれて活動している。また、毎月、グループ責任者による会議を開き、活動内容の報告や意見交換、協力依頼などを行っている。



ペガサス医療体験デイ

平成9年度から毎年1回、秋に開催していたイベント。地域の方々に病院に来ていただき、看護師体験、介護体験、放射線部門・検査部門見学、リハビリテーション体験、心肺蘇生講習などを通して、ペガサスや医療について理解を深めていただくことを目的としている。

平成20年度から開催日を広げ、いつでも地域の方々のご希望があれば医療体験をしていただける、「毎日が医療体験デイ」としての体制を整えている。

「毎日が医療体験デイ」を 実践していく 舞台裏の苦労。

こうして、平成20年4月から「毎日が医療体験デイ」が始まった。

魚野をはじめとした委員たちが奔走し、院内にくまなく協力を求めたことは言うまでもない。

「最初に協力をお願いしたことは、医療体験のプログラムづくりです。看護部やリハビリテーション部などそれぞれの部署に、来られた方々に、何を見ていただいて、どんな体験をしていただくのがいいか、考えてもらいました。皆さん、それぞれ中身の濃い内容を考えてくれました。みんなの快い協力があつたからこそ、毎日が医療体験デイ」を始めることができたんです」（魚野）。

さて、実際にはどんな「医療体験」が提供されているのだろう。近

隣の中学生たちが看護師体験に訪れた、ある日の馬場記念病院を覗いてみた。

中学生たちは、病院の内部を見てうれしそうだが、看護師の話が始まると皆、真剣なまなざしに変わった。この日、中学生たちは血圧の測り方などを学んだり、病棟で患者さまの車いすへの移乗の介助なども体験した。「看護師という仕事への憧れがふくらんだ」と彼女たちは目を輝かせる。このなかから、将来、この地域で看護師として活躍する人材が生まれるかもしれない。

魚野は言う。「お申し込みは非常に多いですね。小・中学校では職業

体験というカリキュラムの一つとして、申し込んでこられます。高校生以上になりますと、医療界への就職を検討している生徒さんや学生さんが来られます。職種で言うと、看護師、リハビリテーションスタッフ、栄養士の職場を体験したい、という方が多いですね。また、学校の長期お休みには、専門職をめざす方のための特別プログラムなども用意しています」。

「いつでもどうぞ」という体制、大変ではないだろうか。「正直言って大変です。馬場記念病院は救急病院なので、患者さまの受け入れ状況によっては、予定していた見学コース



へご案内できないこともあります。何よりも大変なのは、受け入れる部署側の対応ですね。人気のある部署では、かなり無理をお願いしていると思います」（魚野）。

馬場もそんな現場の大変さは充分にわかっている。

「広報活動は委員会だけでは決してできません。だから、職員の皆さんには日常の業務に加えて多くの負担をお願いしています。ただ、こうしたイベントを通じて、私たち職員は『見られている』『見せなくてはならない』という意識を持つようになり、それが職場のモラルアップや個々のモチベーションアップにつながると思っています。当然、法人内の透明性も高まります」。さらに馬場は続ける。「医療人はどうしても自分の専門分野に限られがちです。でも、広報活動に参加することによって、地域医療というもう一つ上の視点でものごとを考えられるようになる。そういうことも期待しています」。

「広報活動の根底にあるもの」

すべての原点は
「ペガサスの約束」にあった。

ただ伝える広報から、患者さま、地域の皆さまに参加していただく広報へ。
着実に進化していくペガサスの広報活動だが、その原点はどこにあるのだろうか。
ここからは、広報活動の根底にある社会医療法人ペガサスの理念、
そして本誌『つばさ』の編集活動を中心に追っていききたい。

病院機能評価を行う 専門家が疑問を 投げかけたこと。

平成20年11月中旬のある日。馬場記念病院の会議室では、「財団法人日本医療機能評価機構」のサー



ベイヤ（病院機能評価を行う専門家）たちを前にして、馬場記念病院・管理職の面々が緊張した面持ちで座っていた。病院機能評価の訪問審査を受けていたのである。

病院機能評価ではいくつかの領域において総合的に評価される。そのうちの一つに「病院の理念と基本方針」がある。ここでは「理念と基本方針が確立されているか」そして、「理念と基本方針が病院の内外へ周知・徹底されているか」などが問われている。ぴりぴりとした緊張感が漂うなか、一人のサーベイヤがこんな疑問を投げかけた。

「貴院では医療理念を『ペガサスの約束』という形でまとめておられますが、ほかの病院とは全然違いますね。文体も詩的で、わかりづら

くないでしょうか。また、広報誌『つばさ』も、一般的な病院広報誌とはまったく異なるようですが……」

「ペガサスの約束」は法人各施設に掲示されているので、ご覧になった方もおられるだろう。少し長くなるが、全文を次ページに紹介しよう。

確かに一般の病院理念では、「当院は質の高い医療を提供します」といった宣伝調のフレーズが多い。それらとは一線を画した文章である。また、本誌『つばさ』の内容が一般の病院広報誌と異なることは、読者の皆さまが誰よりもご存じだろう。

馬場はサーベイヤの意外な質問に驚きつつも、毅然とした面持ちで答えた。

「『ペガサスの約束』には、私たちがペガサスグループの理念と基本方針



病院機能評価とは

患者さまが安心して質の高い医療を受けられるように、第三者機関である「財団法人日本医療機能評価機構」が病院の現状を評価し、客観的な視点から、病院の機能、安全管理体制、療養環境などを評価する制度。

5年間の認定期間が満了すると、更新審査を受審し、水準を満たすと認定証が発行される。馬場記念病院は平成11年、初めての認定を得てから、今回は3回目の審査で、病院機能評価項目の当時の最新版である「バージョン5.0」の審査を受審した。

『ペガサスの約束』

すべての真ん中[・]にいるのは、患者さまです。
はりつめた瞬間^{とき}も、案ずる時間^{とき}も、
そしてゆるやかな日々^{とき}も、ともに過ごします。
すべてを支えているのは、人と、町とのきずなです。
どこから見ても、誰にでも、
よくわかる病院であり続けます。

ふるえる心に、よりそい。
待ちわびる思いへ、語り。
新たな願いと、手をたずさえ。

一つひとつの生命^{いのち}を、まっすぐにどこまでも
見つめていきます。



が凝縮されています。ここには、私たちの思いのすべてがあると言っていると思います。そして、その約束を本当に体現しているかどうかを記録するためのツールとして『つばさ』があるんです。『つばさ』ではペガサスの取り組みのケーススタディを取り上げ、外部の方に伝えるとともに職員全員へ伝え、法人の医療ビジョンを文字通り周知・徹底させる役割を担っているのです。また、いわゆる日常的なお知らせなどは『ペガサスユース』に盛り込み、情報を補完する仕組みになっています。

病院理念のひな形にはまることなく、独自の表現で理念方針を表し、それをまた独特の広報ツールで法人内外へ伝える姿勢を一貫して貫いている。そんな法人の姿勢を理解してもらおうと、馬場は言葉に力を込めた。

他の医療機関に先駆けて 広報委員会を発足。

話は十数年前にさかのぼる。

他院で経験を積んできた馬場が、馬場記念病院の副院長を経て、平成7年に医療法人ペガサス理事長、平成8年に馬場記念病院院長に就任。この頃よりさまざまな角度から法人組織の改革に着手し、その一環として「広報委員会」を立ち上げた。当時、医療機関では「広報」という概念はほとんど普及していなかった。もちろんペガサスも例外ではない。

「まず、私たちのことを外部の方たちにもっとわかってほしいと思いました。それは患者さまが地域医療を理解し、医療機関を利用する上でも役立つことです。そのためにはどこから見ても、誰にでもよくわかる病院、そして法人にならなくてはなりません。では、その活動を誰がやるのか。当然、職員が主体となつて進めるべきなので、職員による広報委員会を立ち上げたのです」と馬場は語る。さらにこう続けた。「もう一つの大きな狙いは、私たち自身の成長です。法人内の情報を外側に発信することによって、自分



たちの中身も高められると考えました」。

広報委員会の初代委員長を担ったのが、現・事務部長の田中恭子である。「当時は、私たちのことや医療について、とにかく知ってほしい、伝えたい、という強い思いがあつて、それを一気に放出するように精力的に取り組みましたね。それで、広報誌『つばさ』を発行し、ペガサス医療体験デイを始めました。医療体験デイの〴〵来て、見て、知って、これからのペガサス」というキャッチコピーには、そんな私たちの思いがよく表れていると思います」。「それに…」と田中は続ける。「広報委員会は、理事長の諮問機関という位置づけにあります、と言われた

理事長の言葉がとても印象的でした」。

諮問機関とは、行政の諮問に応じて、指名された学識経験者などが審議を行い、行政に意見する機関のこと。つまり、自分たちが感じている課題や提案を直接、法人のトップに進言できることを意味する。こうした発言からも、馬場が当時からいかに広報活動を重視していたかが伺える。

『つばさ』第1号の 発行から 十数年を経て、今。

こうして広報委員会がスタートし、平成9年10月『つばさ』第1号が発行された。特集テーマは「家族の役割」。ある日突然、家族の誰かが倒れて病院へ搬送されることになつたら、家族はどうすれば良いか。その家族を馬場記念病院をはじめとするペガサスグループはどのように支えていくか。そんな問題をノンフィクション、そしてドキュメンタリータッチで綴って紹介した。

ちよつと変わった広報誌『つばさ』を手にとった患者さま、ご家族の方はどうご覧になつただろう。そのすべてのご意見は把握できないが、高く評価してくださる方がいたことも

事実である。また、号を重ねることに、職員の間でもその存在が認められ、法人各施設のスタッフも含め、広く読まれるようになっていった。

編集のこだわりは、どんなところにあるのだろう。広報委員会・編集グループのリーダーであり、『つばさ』の編集長を務める立永浩一（馬場記念病院・臨床放射線部主任）は言う。「僕は『つばさ』の17号から携わってききましたが、一貫しているのは『嘘は書かない』ということですね。きれいなことを並べるのではなく、やっていること、真実の思いを正直に活字にするようにしています」。

広報というと、『宣伝』と同じ意



味に混同されやすい。しかし、実際は情報をわかりやすく伝え、患者さまの理解や共感を仰ぐことが広報の目的である。ペガサスの約束にある「どこから見ても、誰にでもよくわかる病院であり続けます」という思いを体現するという、高い心意気をもって『つばさ』は編集され、法人内外へ配布されているのである。

さらに立永はこんなふうに話を続けた。「僕自身、編集に携わるようになって、広報や病院、法人に対する見方が180度変わりましたね。正直言つて以前は、自分の専門以外のことは、あまり理解していなかつ

たんです。いろんな職員への取材を通じて、皆さんがそれぞれの分野で本当に頑張っているんだということがわかり、視野が大きく広がり、自分自身にすごくプラスになっていきます」。

『つばさ』の初代編集長であり、今は立永を支える形で『つばさ』の編集に携わる魚野も、「検査技師という専門職以外にやりがいの持てる役割があり、とてもありがたいと思っています」と語る。馬場が狙いとする職員のモチベーションアップは、確かに実を結んでいるようである。

社会医療法人として、 より広範な情報提供を。

いわゆる病院からのお知らせではなく、病院理念を発信するツールとして継続されている『つばさ』。その根本は変わらないが、役割が微妙に変化してきたと馬場は感じている。

「最近では、医療の問題がマスコミで取り上げられる機会が増えていきます。そのなかには、現場の私たちがするとちよつと違うんじゃないか



「きちんと正しいことが伝わっていないのではないかな」ということもあります。そういうことも私たちはきちんとお伝えしていきたい。単に私たち法人のことだけでなく、医療の現場の状況を、社会の課題と捉えて発信したいという思いがあります。これは、『つばさ』の発刊された十数年前と違い、変化してきたことですね」。

そんな馬場の思いは、たとえば、平成20年春号「緊急特集／馬場記念病院の救急医療は今——」などに表現されている。この号では、マスコミで救急医療の崩壊が叫ばれるなか、「救急患者さまを断らない」思いで必死に闘っている救急医療現場をレポートした。このなかで馬場は救急不全の原因に言及し、その解決策は地域全体の取り組みと、患者さまの意識改革にあるのではないかと、と提言している。

今後の広報活動について、委員会のメンバーはどんなふうに考えているだろう。市民公開講座を担当した柳野は言う。「開催にあたって、本当にたくさんさんの職員にサポートしてもらいました。そこで感じたことは、こういう機会を通じ、職員みんながペガサスで働くことに誇りを持ってくれたらいいということです。外側に広報すると同時に、内側には

働くプライドを醸成すること、も、広報委員会の役割だと思えますし、少しでも自分がお手伝いできたらうれしいですね」。この意見に同調するように、立永は続けた。「広報は広報委員がやるものじゃなくて、職員一人ひとりがするもの。究極の広報ってそうだと思うんです。そこをめざして、一人ひとりが病院や法人のことを誇りに思い、外へ伝えていけるような活動を進めていきたいですね」。

最後に、馬場は法人全体を見渡す立場から、こんなふうに締めくくった。

「これから私たちは、社会医療法人の名にふさわしい、より公益性の高い法人として成長していかないといいけません。したがってペガサスの広報活動も、地域社会に向けて発信するということの意味合いが強くなると思います。医療界のあり方なども含めて、私たちが率先して情報を提供することが必要になっていくでしょう」。

社会医療法人として、ペガサスの広報活動はさらに進化のステップを歩んでいこうとしている。そして、その根底には「ペガサスの約束」があり、法人の理念を共有する職員たちの頑張りが支えている。



Pegasus Tsubasa

special
2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、
そして、看護、介護に関連する事業所と、連携を行っています。
診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。
丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、
患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。
看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。
ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、
快適な生活の場そのもののご提供により、皆さまを支援します。
special 2では、こうした診療所、事業所をご紹介します。

※ 診療所（アイウエオ順）そして事業所の順でご紹介しています。

最

新・最高の機械と技術を使って
ミリ単位の癌まで発見するクリニック。

診療所

地域のプライマリ医であり、
専門医でもあるクリニック。

● 院長である父親と共に
地域の患者さまの
診療活動に取り組む。

「自分は総合医でもあり、専門医でもあるし、そうあるべきだと思っています」と語る白畠伸宏副院長。近畿大学医学部卒業後は「内視鏡に興味があり、『もっと巧くなりた』という目的があつて」大学病院や民間病院の内科や消化器科に勤務。現在はお父さまが院長である「白畠内科」で副院長を務めながら、馬場記念病院や労災病院の消化器科で非常勤勤務をする専門医でもある。

しかし、診療所では特殊な診療科目を標榜しても、地域のプライマリ医師（かかりつけ医師、家庭医）として全般的に診ることができなければ意味がない、と言う。「小さい頃から、夜中に駆け込んで来る患者さまを一生懸命に診療している父親の姿を見て育ってきたので、自然にそう思うようになりました」。

勤務医時代、プライマリケアを受けているのに進行末期癌でやって来

る患者さまが少なからずいて、「何のためのかかりつけ医なのだ」と不満を抱いていた。問診をしながら「このポイントで自分が癌を見つけていれば、この患者さまは助けられたかも知れない」と歯痒い思いも。

「癌という病気は『見つかる』病気ではなくて、『見つかる』病気だと思っています。プライマリケアをするなかで、ちよつと体重が減ったなど気になる症状があれば、患者さまに胃の検査を受けていただいたり、癌検診を勧めています。それもプライマリケアの一つだと思っています」。

● 白畠内科の患者さまから
「胃癌や大腸癌で亡くなる人を
ゼロにしたい。」

白畠内科の内視鏡は、最新の機種。機種はもちろん診療報酬には反映されない。が、「ミリ単位で癌を発見したい。ミリ単位ならば、患者さまの体を開けたり胃を切らない

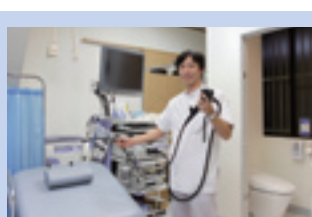


でも、内視鏡で削って簡単に直してあげられる。すべては患者さまのため」。

副院長がこれからの馬場記念病院について希望することは、「これまで同様、救急時はベッドが満床でも受け入れ続けていただきたい。特に寒い季節になると、脳関係の疾患が増える傾向になります。そういったときは何といても馬場記念病院が頼りですから、従来どおり救急はお任せしたいと思っています」。

この言葉には、早くから地域医療に目を向けてきた馬場記念病院に、堺の基幹病院として、そして、救急

の本丸的病院になって欲しいとの思い、そして自らも一緒にあって、地域において信頼できるネットワークを構築し、医療の質の連続性」を図ることができる仕組みを作りた、という願いが込められているようだ。



白島内科

院長：白島俊治
副院長：白島伸宏
住所：堺市西区鳳西町 3-3-9
TEL：072-265-5501
診療科：消化器科、内科、心療内科、放射線科、アレルギー科、リウマチ科

漢

方・東洋医学と西洋医学の両面から
患者さまのあらゆる健康問題に対応する。

診療所

どんな健康相談にも気軽に
応じられる家庭医として。

● 東洋医学と西洋医学、
「良いところ取り」の
医療を提供する。

かつて熊野古道として栄えた街道に、多くの店が軒を連ね、今も賑わいをみせる鳳本通商店街。JR阪和線・鳳駅から徒歩2分に位置する、そのアーケード内の一角に「三谷ファミリークリニック」は平成19年11月、開設した。漢方・東洋医学

を専門とする三谷和男院長と、西洋医学を基に糖尿病等の慢性疾患を数々診てきた巽 欣子（たつみよしこ）副院長、異なる分野のスペシャリストがそれぞれの見地から相互に診療を行う珍しいスタイルの診療所だ。

「例えば、西洋医学では病名が付かないと薬を出せないんですね。ですが、漢方なら、それぞれの不快な症状に応じた処方ができる。一方、東洋医学で見つけられない病巣も、西洋医学の検査方法を用いると発



見できたりする。そんなふうに、西洋医学と東洋医学を組み合わせれば、治療の可能性は無限に広がるんだということを、ここを開設してから特に実感していますね」と両医師は、しみじみ語る。

元々、お父さまが加賀屋病院（大阪市住之江区）で東洋医学中心の診療を行っており、子どもの頃から身近に漢方があったという三谷院長は、現在も京都府立医科大学の東洋医学講座で教鞭を執り、後進の育成にも励んでいる。患者さまに漢方薬を出す際には、ただ症状を診るだけでなく、患者さまの家族構成や社会状況なども把握した上で処方する。そんな三谷院長に傾倒し、堺市西区にある病院の内科で西洋医学による糖尿病診療にあたりながら、漢方の勉強にも余念がなかった巽副院長。

2人の医師が作った診療室内には、X線や超音波エコー、すぐに結果がわかる血液検査機など最新の医療機器とともに、ミスマッチとも思える経絡人形や漢方薬の煮出し

用ポットなどが並ぶ。

● 人々が行き交う商店街で
人々の暮らしに寄り添う医療を。

「おもしろいでしょう？」親しみやすい温かな笑顔を向ける三谷院長のもとには、漢方の煎じ薬を入れてもらおうと、水筒を持参して買い物途中に立ち寄る患者さまも。「開業するなら商店街で、と考えていたんです。誰もが気軽に立ち寄れる、庶民的な雰囲気クリニックに憧れていました。ビルの2階ではなく、1階にこだわったのも、そのためでした」と語る巽副院長の想い描いていた姿がそこにある。地域に根ざす「家庭医（かかりつけ医）」であることをめざして付けられたという「ファミリークリニック」というその名のとおり、開院以来すでに地域の人々にとって、なくてはならない存在となっている。馬場記念病院などの急性期病院との連携はもちろん、



三谷ファミリークリニック

院長：三谷和男
副院長：巽 欣子
住所：堺市西区鳳東町4丁354-1
Primo おおとり1-B
TEL：072-260-1601
診療科：一般内科、各種検査、漢方診療

往診も行ってくれるのは、とても心強い。

「食の問題が大事です」。今後は、商店街の近くに食堂をつくる計画だという。漢方治療には、その治療に沿った食事、季節に応じた食事が必要不可欠だからだ。診療所開設以

来、「患者さまが作った野菜がたくさん届く」そうで、「患者さまが作った野菜を、患者さまが料理して出し、患者さまが食べる、そういう食堂を創りたいと考えています」。医療だけでなく、コミュニティの場も提供できれば、と2人の医師は笑った。

24

時間ナースコール対応の住宅型 有料老人ホーム。常に花が咲くような 温かな環境づくりをめざして。

事業所

『住宅型』でありながら、安心して介護を委ねられる環境。

● 入居者の平均介護度は3.1。
その中で「1対1」の介護をめざす。

阪堺電軌堺線東湊電停前から徒歩で8分ほどのところに建つ、住宅型有料老人ホーム・花咲浜寺は、八尾と池田に介護施設を持つ株式会社ライクが母体となり、ライクネクス株式会社（2007年8月に開業）が「いつも花が美しく咲いているような、心身共に温かな場所に長く住んでいただきたい」。そんな願いから付けられた名前の通り、スタッフは入居者に温かく丁寧なゆつたりと接することを心がけているという。

「一般に『住宅型』では介護が必要になった場合、訪問介護という名目で介護が受けられる反面、介護度が重くなれば別途費用がかかり、ホームに居づらくなるなどの問題も起こる。その点については「こちらの入居者はそもそも平均介護度が高いので、現在平均して3.1くらいですが、4や5の方もみえますよ」とセンター長の中山美代さん。「24時間ナースコールに対応して、1対1の介護を心がけている」という花咲浜寺では、従来の住宅型における「介護は別」というイメージとは異なっているようだ。



裕があるため、今後の入居者数に合わせてスタッフも増やしていく予定だ。「とにかくウチのスタッフは自分が感心するほど熱心」と言うのは事務長の山田拓爾（たくじ）さん。以前、病院に搬送されて亡くなった利用者の息子さんから「花咲に入れたことが母親への一番の親孝行になりました」と挨拶されたこともあるという。「規模が大きくなっても、今の介護の形が変わらないように、というのが目標です」。

● 入居一時金不要。
全室介護ベッド導入。
すべては利用者の負担減のため。

花咲浜寺は利用者のプライバシーを守るため、全個室。約5.5坪ほどの部屋の中に水周りやトイレも完備。全室に介護用ベッドも備え付けてある。「こちらに入居すれば、要支援の方でももちろん利用できます」。

部屋にはスプリングラーや火災報知器も設置し、安全、安心への配慮も行っている。また、入居時に原価償却という形で何百万という高額な入居一時金を納める施設も多いなかで、同ホームは一律15万円の現状回復費のみ。入居時に高額費用がかからないのも入居者にとつてはうれしい限りだ。

ところで、介護度の高い利用者が多くなれば、病院への緊急搬送も多

くなる。ホームには2週間に1回、ドクターが往診にやって来るが、もちろん近隣の病院とも連携して医療面のサポート体制もとっており、緊急の場合は馬場記念病院に搬送されることになっている。「緊急はやはり夜間が多いですね。でも夜中の搬送は利用者にも負担がかかるので、病院に運ぶべきか、かかりつけのドクターに来てもらうか、状況を見て判断しなければ」。それはとても難しい判断だが、そのためにも日頃から利用者一人ひとりの様子をよく見て、バイタルなどを把握しておくことが重要だとセンター長は語る。

「施設としては、入院できるかわきないかは別として、とりあえず受け入れていただき、少しでも早く処置をしていただければと思います。そういう意味で、24時間対応してもらえる馬場記念病院と連携しているのは心強いですね」と事務長、センター長は声を揃えた。



住宅型有料老人ホーム 花咲浜寺

事務長：山田拓爾
センター長：中山美代
住所：堺市西区浜寺石津町中1-1-1
TEL：072-280-0082
施設種別：住宅型有料老人ホーム

Pegasus Tsubasa

医療が変わります。 ペガサスも変わります。

地域医療を取り巻く環境は、変わり続けています。その変化を見つめて、ペガサスでは、馬場記念病院を中心に、さまざまな取り組みを行っています。その取り組みの目的や方向性、また、皆さまにご理解いただきたい点をお伝えします。



医療法人ペガサスは、
平成21年1月1日より、
「社会医療法人ペガサス」
となりました。

近年、我が国では、高齢化や少子化が進むとともに、医療技術の進化、さらには国民意識の変化など、医療を取り巻く環境は大きく変わり続けています。そうした背景のもと、国民からの医療に対する信頼と安心感の獲得、また、それに対応する質の高い医療サービスを提供することができるよう、国を挙げて、医療提供体制の見直しが続けられています。

その一つとして、「社会医療法人」が新たに誕生しました。「社会医療法人」とは、民間の医療法人が、地域医療の重要な担い手として、その役割を充分に果たすことができるよう創られた制度です。認定を受けるには、救急医療をはじめ、地域に不可欠な医療の提供を行っているという、地域において公益性の高い法人であることが必要となります。また、認定は、申請を出した法人に対して、厚生労働省が告示する一

定の客観的基準に基づき、各都道府県医療審議会での審議を経た後、都道府県知事により行われます。大阪府では、平成21年1月1日、ペガサスをはじめ、7法人が認定を受けました。

使命と責任を強く心に刻み、
良質で適切な医療提供を
めざします。

これまでペガサスは、救急・急性期・回復期・慢性期・在宅医療、そして予防医学にまで翼を広げ、各領域での質の向上に努めてきました。その過程において、馬場記念病院・救急医療では、救急医療功労者（団体）部門で病院として唯一、大阪府知事表彰を受賞、また、同じく急性期医療では、日本経済新聞社による脳疾患治療実力病院調査にて、最高（AAA）評価をいただくといった実績を重ねています。

新たに「社会医療法人」となった今は、良質、そして適切な医療の提供に、さらなる努力を続けることは言うまでもありません。そしてその根幹として重要となる、地域の医療機関や関連事

業所とのネットワーク強化、併せて、すべての活動を継続的に行うことができるよう、安定性と透明性のある医療経営にも全力を注いでいきます。
社会医療法人の「社会」という名の、使命と責任を強く心に刻み込んだ私たちペガサス。地域の皆さまのご期待に、しっかりと応えることができるよう、一步一步、前進を続けていきます。



大阪府医療対策課にて

地域医療を考えるペガサス情報誌



発行人 馬場武彦
編集長 立永浩一
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
編集協力 HIPコーポレーション
発行 社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

本誌は再生紙100%を使用しています。

special 1	「病気を治す」以外に病院ができること 社会医療法人ペガサスの広報活動は 「伝える」から「参加していただく」へ
special 2	医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。

※記事の制作にあたり、患者さまや診療所の先生方、事業所の方々にご協力いただき、心から御礼申し上げます。

BHI 賞グランプリ獲得

表紙のBHIマークは、ペガサス情報誌「つばさ」（22～25号）が、第7回ヘルスケア情報誌コンクール（BHI賞）においてグランプリを獲得し、主催者であるNPO法人日本HIS研究センターから贈呈されたものです。



大きく変わろうとする医療のカタチを、
そしてここでのペガサスの機能と役割、また、方向性を、
地域の皆さまに知っていただきたい。

その願いから、これまでペガサスでは、
さまざまな広報活動に力を注いできました。
その一つひとは、現場の職員たちが、
患者さまやご家族の立場になつて考え、創り上げたものです。

そうした活動を始めてから、10年以上が過ぎた今、
私たちは、一つの大きな気づきを持ちました。

それは、地域の皆さまに「知つて」いただくだけでは足りない。
医師不足、救急受け入れ拒否など、医療に関わる問題が、
大きく社会で取り上げられている今日、

「自らの問題として、医療を、病院を考えて」いただく。
そして、地域医療の真の高度化に、
当事者として参加していただくことが大切であるという点です。

私たちペガサスは、より公益性の高い社会医療法人として、
これからも皆さまに有益な広報活動を続けていきます。
どうぞ皆さまも、一緒になつて、
医療を、病院を、そして健康的な生活を、
お考えいただければと思います。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦



社会医療法人
ペガサス